# 「南砺版エコビレッジ事業」の更なる深化～域内外のブランディング強化と南砺版地域循環共生圏の実装～

富山県南砺市（2019年度選定）

## 1.地域の特徴と課題及び目標

富山県の南西部に位置し、2004年11月に８つの町村の合併により誕生した人口46,297人（2024年8月末時点）の自治体。面積の約8割が森林であり、豊かな自然に恵まれている。川上の山地には世界遺産の合掌造り集落が残る。
南砺市は今後を見据え、「環境保全・エネルギー」「農林漁業」「健康・医療・介護・福祉」「教育・次世代育成」という地域社会の根幹を支える４つの分野が相互に連携・連動しながら地域の自立と循環を図ることを目指している。

## 2.関連するゴール

## 3.取組の概要（三側面をつなぐ統合的取組概要を含む）

三側面をつなぐ統合的な取組として整理した「土徳文化」は人材育成、次世代教育、文化の継承という精神面での役割を担い、「小規模多機能自治」が地域の課題解決能力を高める組織面での役割を担い、「南砺幸せ未来基金」が資金面でのサポート及びネットワーク形成を担う。
この３つの取組がすべての取組のエンジンとなって経済面、社会面、環境面への好影響を及ぼす。それを数式で整理したものが以下の数式で表される南砺版地域循環共生圏であり、「一流の田舎」である。

自立分散（小規模多機能自治、南砺幸せ未来基金）×相互連携（土徳文化、地域包括ケア）×循環・共生（エコビレッジ構想）＝活力あふれる循環共生圏（一流の田舎）

## 4.自治体SDGs推進等に向けた取組

・「南砺幸せ未来基金」について
南砺幸せ未来基金は、行政と民間の間に位置し地域課題に資する活動を支援する中間支援組織。市内外からの寄付金を原資として助成事業を展開している。さらには休眠預金等活用事業の資金分配団体となり地域外からの資金を呼び込むと共に行政間の隙間に位置する課題への取組を支援している。
2023年度には、9団体に助成を実施し、移住者支援や伝統文化継承、地域の居場所づくりなど、地域課題の解決に向けた取組に支援した。複雑化・複合化した課題には市内のリソースを最大限活用する必要があるが、取組を通してゆるやかなネットワーク形成が構築されつつある。

## 5.取組推進の工夫

南砺幸せ未来基金は、地域性、市民性を持つ財団（コミュニティ財団）である。立ち上げにあたっては行政が一定の役割を持ったが、財団の意思決定は、市民、地域、企業、金融機関などで構成された役員が実施する。中間支援組織としての位置づけを明確とすることによって多様な意見を取り込める体制となっている。

## 6.取組成果

南砺幸せ未来基金は2023年度9団体へ資金的支援を実施した。内訳としては地域で活動する団体や個人が地域資源を活かし社会的な課題の解決に取り組む活動を支援する「市民活動応援事業」に3件、ビジネスの手法を用い新たな雇用の創出等の地域課題の解決とコミュニティの活性化に寄与する活動を支援する「社会貢献事業化プログラム」に2件、休眠預金活用助成に4件である。支援の原資を市内外からの寄付金にて調達すると共に、休眠預金活用の資金分配団体となり地域外からの資金を地域内に投入している。課題に向き合いながら地域資源を活用した助成事業を展開することによって、地域団体の自主的な取組が増えてきており、団体間のネットワークが図られつつある。
【実績】
基金への寄付金総額：2,000万円以上
助成団体：30団体以上

## 7.今後の展開策

助成事業を通してネットワーク形成を図っていく。そのために助成を受けた団体等の活動報告会を実施し、情報や課題の共有を図っている。また、取組の段階ごとに分けた助成事業を立ち上げることや、地域住民や市民活動団体等に地域課題のヒアリングを行い、市民に寄り添った支援体制を整えていく。さらに、金融機関と連携した投融資制度、ふるさと納税との連携等についても検討を進めていく。

## 8.他地域への展開状況（普及効果）

休眠預金活用事業において、他地域のコミュニティ財団とコンソーシアムを組んでおり（2020・2021年度事業：(公財)うんなんコミュニティ財団、(公財)東近江三方よし基金 2022年度事業：七尾未来基金設立準備会）、共通した課題を持つ地域の財団が連携することで、解決のためのアプローチ方法やノウハウを他地域へ共有・展開を図っている